一枚のポストカードから

ふさふさしっぽ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一枚のポストカードから

【Ｎコード】
Ｎ５９２４Ｙ

【作者名】
ふさふさしっぽ

【あらすじ】
さつきは西洋アンティーク（アンティーク）が好きな２５歳のＯＬ。今年最後の骨董市へわくわくしながらやって来た。いい骨董に出会えるといいけれど・・・。

いざ骨董市へ

「おお、なかなか賑わってる」

さつきは入場券を鞄にしまうと新たな出会いに胸をときめかせて、いそいそと会場に入った。特別に騒がしいわけでも、しいんと静まり返っているわけでもなく、独特な雰囲気を生み出しているここは、大規模な骨董市「ごった混ぜ骨董（アンティーク）フェア」の会場である。さつきが求める新たな出会い、とはもちろん骨董品との出会いのことである。なにせさつきは、大学時代に何気なく地元の骨董市をのぞいて西洋アンティークに魅せられて以来、すっかりアンティークの世界にはまってしまったのだ。アンティークに魅せられてはや5年、さつきは世間一般ではお年頃だというのに、色恋にまったく興味を示さず、休日と言えば骨董市を巡る日々を送っていた。

さつきが訪れることができる大規模な骨董市は今年この「ごった混ぜ」が最後なので、今年を満足感いっぱいで締めくくり、正月を気分よく迎えるためにも、いい骨董が手に入ることをさつきは大いに期待していた。

「さあーてと」

さつきは心の中で腕まくりをして気合を入れ、自分がお目当てとする西洋アンティークのブースに向かった。会場は大きく3つの区画に分かれていて、それぞれ「和骨董」、「西洋アンティーク」、玩具やキャラクターものを扱う「トーイ」のディーラーが集まっている。

「ごった混ぜ骨董フェア」は３００以上のディーラーが集まり、年２回夏と冬に開催される。規模は大きいが名前の通り売られているものはごった混ぜで、玉石混淆ともまあ言える。いかにも骨董、アンティーク、と言えるような古めかしくも趣のあるものから、近所のバザーでお目にかけそうな一昔前の小物類といったようなものまで、さまざまである。買い求める人も、貴重な価値ある骨董品を手

に入れようと目を光らせて見定めている人から、ちょっとした趣味で気に入ったものを無理のない値段で、価値を気にせず気軽に買ってゆく人までさまざまである。

さつきはあきらかに後者に属していた。というより、ごくごく一般家庭に暮らす、今年２５歳になる庶民の娘には「いかにも価値ある骨董品」など手が出ないのである。また、さつき自身も骨董の値段的な価値よりも、その骨董に対して自分の胸がきゅーんとなるかどうかを重視していた。お気に入りの一品に出会えたときは、胸に熱いものが込み上げて来て、きゅーんとなる。骨董に興味が無い人から見たら「錯覚だよ」「もっとちゃんと吟味して買え」と言われそうだが、さつきはこの「巡り合えた」ともいうべき直感を大事にしていた。

とはいえさつきも社会人となり、多少は学生のころよりも財布の無理がきくようになったので、今日も今年の締めくくりに相応しい骨董を買うぞと予算は多めに用意していた。骨董品と運命的な出会いを果たしても、予算が足りなくて泣く泣くあきらめざるを得ないなんてことは絶対に避けたい。

さつきは慎重に、まず西洋アンティークのブースを一回りした。さつきが今欲しいのは、部屋のアクセントになるような刺繍の額だが、実用性を考えるならさりげなく付けられるブローチも捨てがたい。それらを中心にすべてのディーラーを見て回ったが、残念、これといったものは無かった。

さつきはわくわくしていた気持ちが少ししぼんでいくのを感じた。けれども気合を入れ直し、２週目に入る。骨董品は雑多に並べられていることも少なくないので見落としがあるかもしれない。

「うーん」

それでもやっぱりこれ、というのは無かった。さつきは心の中で頭を掻いた。

「いくつか目に留まるものはあるけれど……どうしても欲しいっていうわけじゃないんだよね」

胸がきゅーんとならないのだ。なんというか、目の前でぱあっとライトが一瞬つくぐらいの気持ち。それでもここまで電車でわざわざ足を運んだのだし、なんてったって今年最後の骨董市だし、何も買わずに帰るのも空しいよなあ、とさつきは思った。心に木枯らしを吹かせながら「運命の出会い」を求めて未練がましく3週目に入ったさつきは、ふとポストカードの束を目にした。「ＳＡＬＥ！！一枚５００円」と大きく表示されている。

さつきは何気なくポストカードの束を取り、一枚一枚後ろに回しながら順々に見ていった。いい感じに古びたポストカードは８０~１００年くらい前のものだろう。未使用のものもあれば使用され消印があるものもあった。少女の絵や写真を、ポストカードにしたものが多く見られ、異国の少女が花かごを持って微笑んでいたり、子猫と戯れていたりしていた。１００年という時を感じさせる。そして、出会った。

一目見て、胸が熱く高鳴り、きゅーんとなった一枚があったのだ。それは、ハートのトランプをモチーフにしたポストカードで、中央には妙齢の女性が美しい色遣いで描かれていた。女性は憂い顔で俯いている。その顔が、なぜかさつきの心を鋭く打った。ポストカードは金色で縁どられ、左上の角と右下の角にハートマークが施されていて豪華なのだが、真ん中に描かれている可愛らしい金髪の女性は物憂い様子だ。そしてどこか寂しげだった。

その対称的な所に惹かれるのかなと思いつつ、さつきはそのポストカードを即買い決定していた。すぐにディーラーの主（あるじ）に尋ねる。

「すみません、これを頂きたいのですが」

「２５００円です」

「えっ」

さつきは驚いて固まった。５００円じゃないの？

結末は・・・・・・

「で、よく見たら５００円ヨリ、だったわけだ」
「そ～なのよ、やんなっちゃう５００円均一かと思った」
骨董市を後にしたさつきは、近くのミュージックストアで偶然会社の友人と会い、喫茶店へと場所を移した。さっきから目の前の友人はレモンティーをすすりながら、さつきが話す骨董市での事の顛末をげらげら笑いながら聞いていた。
「で、２５００円で買ったの？」
「買った」
そう、結局さつきはトランプモチーフのポストカードを購入した。未使用で綺麗な状態だった。さつきはてっきりポストカードの束全部が一枚一枚５００円だと思っていたので、いきなり２５００円と言われて戸惑ったり購入をためらったりするのは当然だったが、それでも結局、購入した。「今買わなかったらきっと後悔するだろう」そう思った。自分は今まで骨董品との「出会いの直感」を信じてきたわけだし。
「直感ねぇ」
さつきと違い、どちらかというと合理的主義のこの女友達は、ニヤニヤして、苺のムースケーキをつつきながら言った。
「そうはいってもあんた、直感信じて買ってはずれも多いんじゃない？ほら、新入社員の頃、これは運命の出会いだー！！とかいって買ったやつが、どっかの外国のおみやげものでさ、高く買わされたーって」
「ああーはいはい、ほんと下らないこと覚えてんだから」
「骨董もいいけどね、彼氏の一人もいないんじゃ、２０代無駄にしちゃうわよ。誰か紹介しようか」
「大きなお世話」
さつきはチーズケーキをガブリと頬張った。

「でも買って良かった」
さつきは帰りの電車を待ちながら購入したポストカードをうっとりと眺めた。「なぜこの女性はこんなに寂しそうなのだろう」ふとさつきは思う。ポストカードの女性は、中世のお姫様を思わせる豪奢な衣装を纏い、金色の髪を上品に美しく結いあげており、どうみても上流階級の人物だった。もっと誇らしくしていてもよさそうな気がする。
「好きでもない人と結婚させられちゃうのかな」
中世、上流階級の女性、ときて、本人の意思を無視した釣り合う家柄同士の結婚を、さつきはなんとなく想像して、またカードに目を落とす。
「あれ」
さつきは何かが頭に引っかかる感じがして目を止めた。よくよくカードを眺めてみると、女性の衣装はどこかおかしい気がしてならない。ああ、中央の縦に並んだ高級そうなリボンが一つ欠けているように見えるためだ、明らかに隙間が空いてしまっている。濃いブルーの、シルクのような生地で、リボンの中央にはオレンジ色の宝石がカチリとはめられていて。
濃いブルーとオレンジ。
さつきにはピンと来るものがあった。胸の鼓動が早まる。
「ドアが閉まります」
いつのまにか電車がホームに入ってきていて、発車のベルが鳴り響いていた。さつきは電車に飛び乗った。

家に着くなりさつきは自分の部屋のクローゼットを乱暴に開け、奥の奥のほうから段ボール箱をいくつか取り出した。
「捨ててないと思うけど」

捨てていませんように、そう願いながら段ボール箱をあさる。
段ボール箱には今までに買った骨董品が収められている。部屋にずっと飾ってあって退役したもの、見た目はかわいいが、使い勝手が悪かったり、実用性が乏しかったりで、いつかは使おうという名の下お蔵入りしているもの、勢いで買ったものの冷静になってみてみれば大したものではなく、しかし値段が値段だったため手放せないものなどさまざまである。
「あった！」
さつきは興奮気味に、引き出しの付いた小箱を取り出した。これこそ、さきほど女友達が言っていた新入社員時代の「はずれ」である。よく見れば陳腐なデザインに安っぽい作りなのに、およそ釣り合わない金額をさつきは支払ってしまったのだ。
しかし今はこの小箱が問題なのではない。購入したときこの小箱に一緒に入っていた絵が問題なのだ。　それはカエルの絵だった。
時を経て紙はこ汚く変色し、よれよれになっている。購入するときさつきは引き出しの中にそれがあるのを気付き、「この絵は入りません」と申し出たのだが、ディーラーの主は、「おまけだからもってってよ」と言ってさっさと小箱ともども包んでしまった。
さつきは小箱の引き出しに入れっぱなしの小さな絵を取り出し、あらためて見た。絵の中のカエルは何かを抱えている。
オレンジ色の、宝石のようなもの。
それに、濃いブルーの切れっぱしがくっついている。
大事そうに、愛しそうに抱えている。「一緒だ、そう一緒だ」さつきがそう思ったとき、
「ねえ、愛しの君、そこにいるんだろう？」
カエルの絵がしゃべった！さつきは思わずカエルの絵を取り落とした。「ねえ愛しの君」絵のカエルが口をぱくぱくさせている。
「ええ、ここにいるわ」今度は部屋に入ったときちょうど炬燵の上に置いておいた、あの女性のポストカードが小鳥のような声で話した。「やっと会えた、愛しい貴方」

ポストカードの中の女性は、嬉しくてたまらないというように、うふふと笑っていた。あの寂しそうな表情などどこにも無かった。カエルの絵の方も、たぶんすごくうれしいのだろう、ゲコゲコと笑う。

再会を喜ぶ女性と、カエル。

ああ、そうか。

さつきにはなすべきことが分かっていた。なぜか、わかっていた。さつきは女性の絵とカエルの絵を、キスをするかのように重ね合わせた。とたんに目の前がぱあっと明るくなって、虹色に輝いた。さつきはその中に、抱きしめあう男女を見た。女性の方は、トランプモチーフのポストカードに描かれていた通りの、美しく気品ある金髪女性で、男性の方は、いかにも庶民、といったいでたちだったが、背が高く、なかなかのイケメンのように見えた。ふたりは虹色の光の中くるりとさつきの方を向き、深々とお辞儀した。そして手をしっかりとつないだまま消えていった。

我に返ったさつきは、目の前にちょんと落ちているポストカードと変色した紙きれを見た。そこには金髪の女性もカエルも描かれていなかった。最初から、なにも描かれていなかったかのようだった。

「魔法が解けたのかも……」

さつきはぼんやりと考えた。

悪い魔女は魔法をかけてイケメンをカエルに変えてしまいました……そして嘆き悲しむ姫ともども絵にして封じてしまいました……

本当のところはどうだろう。それはもう、だれにもわからない。あの友人にこのことを話してもきっとゲラゲラ笑われるだけだろう。それよりも……

「誰かいい人、紹介してもらうか」

さつきは再開を喜び抱き合う二人を思い出し、ぽつりとつぶやいた。冬だけど、気持ちがぽかぽかしていた。

結末は・・・・・・（後書き）

骨董市に行った勢いで書きました。
ハッピーエンドな話が書きたかったので書けてよかったです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5924y/

一枚のポストカードから

2011年11月20日00時04分発行